

教育センター委嘱研究校の発表会

平成6年2月10日(木) 13時15分 横浜市立三ツ沢小学校

「自己学習力育成を図る授業の創造」

芹が谷小学校を昼食抜きで12時に出発、13時5分に到着。PTAの方がたくさん手伝いに出られている様子で、受付、放送、接待などはPTAの方が担当されているように見られた。

13時15分から授業開始

最初は5年道徳授業拝見。「蛍の生息箇所」について話を進めているようだ。椅子のみを使用。スライドを使用、スクリーンには蛍の影絵が映っている。蛍が生息する環境について考える場であろうか。前列左に老人がお一人座って、体を斜めにして、児童の様子を見ている。最初は、教諭OBかと思ったが、30分後に再度参観すると児童の質問に応えているのを見るとどうやら地域の方が蛍について憧憬の深い方なのだろう。

次に同じ階で行われている3年の社会の授業を参観する。3年社会TT(2教室)だ。

TTと書かれた表示札が掛かっている、TTという字の下に4人の教諭の名前が書かれている。児童は、机無しで椅子に座って授業を受ける。前部に「高野さんが来たら座る椅子」という紙を張りつけた椅子があり、地域の方の協力があることを伺わせる。これも30分後に来てみると、高野さんらしい温厚そうなお年寄りが一生懸命に児童の質問に答えている。前には大きな模造紙に書いた年表(きれいに色付けされていて、写真も添付されており、見やすく作られている。)や、何で作ったのだろうか、昔の校舎の模型が置かれていた。石川小学校から校舎が移築された時の様子、苦労を中心に話をされていた。

急いで理科の授業を参観。一階の理科室で授業が行われている。学年は6年、内容はTTによる授業で、水の汚れについて調べている様子、透明度、匂いなどという項目が黒板に掲示された表に見える。児童は6グループに分かれて水の汚れをそれぞれの調べ方で調べている。綿貫先生と女教諭1名の2名の先生が共同で指導している。20分後に来ると実験の結果が出てきているところで、グループの代表が掲示された模造紙の表に結果を書き込みつつある。授業終了10分前に、綿貫先生と女の先生がほんの1分程か打合せをした後、女の先生が実験を終えることを告げ、まとめの時間にはいる。綿貫先生が板書の体制に入り児童の発言を板書していく。

このあと、家庭科の授業を参観、チャイムがなった。家庭科もお二人の先生が授業を受け持つ。簡単な会食らしく、フルーツを切ったりしてきれいに盛り付けをしており、作業台とは別の場所に用意されている会食用のテーブルに運ぶ。先生は、片付けを支持中で、私の参観は終わる。

普段の授業と変わるところはないと思うが、資料等はよく用意されている。かなりの時間と労力がかかっていると推察される。授業中の教諭の話し方は抑揚があり、落ちついていて自信があるように感じられた。

駆け足で参観させていただいたが、職員を始めとしてPTAの方々の熱心さがよく見られた。これだけのことを実現するのにかけた時間、労力、手間、覚悟に敬意を表したいが。

参観途中、理科の早川先生、国語の祖父江先生、算数の渋谷副校長、原田副校長といった先生にお会いしたことを付け加えたい。

講演

新しい学力観に立つ小学校教育の創造

環境教育、TT等を中心に

文部省 主任視学官 山極 隆 先生

新しい学力観について

小学校教育の役割について

共通性が小学校教育の特徴、これに対して多様性があり、現在、高等学校は非常に多様化している。そうでなければ、対応できないのが現状で、今年度、高等学校に総合学科ができた程である。普通科でも多様な学科、コースを設けている。高等学校は多様性、小学校では共通性が特徴。中学校では、共通性をベースにした多様性と言えよう。中学校は今年選択履修の設定が成されてきた。

新しい学習観というのは、新学習指導要領の評価に対して言われる様になってきた。新しい学力という言葉でなく学力をどう見るかであって、学力そのものは昔も今も変わらないと考えている。学力を素直にその字通りに考えていけば良いだろう。子供が学んで得た結果としての力で、その中心は、知識であろうし、技能であろう。新しい学力観という時、学んで得たちからもそうだが、それ以外に学ぼうとする力、意欲、意志をも含めて考えている。生涯学習社会において学校の役割として、学ぼうとする力は大切になるだろう。

学力には、学んでいく途中で発揮する力というものもある。学ぶ過程で発表する力、表現力等がある。結果だけに光をあてていたこれまでの学力観から、それ意外の部分にも光を当ててみていこうというのが新しい学力観と言える。指導要録の観点4つを見ると、意欲関心態度を最初に持っていき、知識理解を最後に持っていたというのに連鎖的な意味を持たせている。関心意欲・・・知識理解 関心意欲態度・・・というように連鎖的なものである。知識理解を最後に持っていたのは軽視したのでなく、これまで以上に重視してもらいたいから最後に書いた。地層に例えると、関心意欲が表層、知識理解が一番深い層になる、表層を通して知識理解にまでしみ込んできた雨水は、関心

意欲、技能思考に基づいた知識理解になっているのである。意欲に裏付けられた知識でないと本当の意味で根づいていないと考える。量としての、受験の為の知識でなく、知識の質が問われているのである。転移できる知識を与える。体験に裏付けられた、転移できる知識を身につけさせることが重要で、知識の伝達を恐れてはいけない。

新しい学力観という、評価の問題に関わってくる。関心意欲の評価にむちゅになるのではなく、それ（関心意欲態度）は、教える側の構えについて言っているのである。

環境教育について

大事であるということは理解できても、実際にはどう教えるかという点では困るのでは？教科を貫く考え方が、学校教育に迫っている。これまでの考え方では対応できない問題が迫っている。例えば、コンピュータの教育が考えられる。これからいよいよ小学校に22台のパソコンを導入したいと考えている。中学校は44台。理科でやる、算数であやるということでなく、横断的な性格をもつものである。環境教育も同じで、横断的な考え方を持つもの。これまでの教科と環境教育をどう絡ませるか、が問題である。教科指導の中でどう捉えるか。教科の指導内容を環境教育的な視点から見直す、教科の目標を達成すると同時に環境教育の目標を達成するのである。教科の指導に、環境教育的な光を当てる。

環境教育の守備範囲は4つある。まず、環境についての教育、環境の為の教育、環境の中での教育、環境教育を通しての教育。

教科の中で、環境について書かれている部分があるので環境の教育ができる。環境について知識を与えるのも大事だがそれが全てではない。環境教育を通して行動に、生活様式の変化に表れなければならない。それが環境教育のための教育で態度形成の部分である。先生は環境教育という視点から指導を進めてもらいたい。それが資源の節約に繋がる。環境の中の教育は直接体験である。調べるだけでなく、調べたことに着いて記録、討論、発表するという活動が必要。環境を通しての教育は、能力の育成である。因果関係を考える力相互関連的に見る力、習慣（一方的に物を見ない）。問題解決の方法を考えだしていく。こうした4つの観点について、どの部分を（教科が）受け持てるのかかんがえてもらえれば結構。大事なのは、環境について先生方が意識する、それだけで大分変わってくるだろうと思います。話が変わって、昆虫採集について、正しい昆虫採集について語れない教師が環境について語れない。正しい昆虫採集を通して生命尊重、自然に対する意識が出る。確固たる考えで昆虫採集を勧められるようになって欲しい。今、昆虫が減っているのは環境破壊が大きな原因なのだから。

TTについて

TTという言葉があまり一人歩きするのは、個人的な考えだが、よくないと思う。

複数教諭による協力的指導がTTの本筋である。

教室に複数の教諭がいるというだけでなく、日頃の、授業を支える場面で、複数教諭が協力してやってもらいたい。過配が行われたということはあまり関係ない。大事なものは開かれた心（教諭の）である。常に他の先生のよいところを見習うという心、態度を

持って立ち向かってもらいたい。

(3 時 3 8 分 講演終了)

研究概要について

南先生より

レジメ参照

研究主題のとらえ

自己学習力

T T は個に応じた学習の形成

環境教育の取り組みは 6 点

環境教育と教科・領域の関わり

子供が実践できることを目指している。そのために環境を意識することを考えた。児童の身近な事象を捉えた。地域の場面（三ツ沢せせらぎの沢、遺跡、公園等）を学習のフィールドとして活用したり、地域の方の協力を得た。

方法

育てたい子供像

講師要請

児童環境委員会を設置した。

児童会活動の中に設置

虫の住める環境作り

T T、教科分担方式

指導組織の改善

学習グル - プの改変

教師の専門生を生かした組織、専科を廃止し、学年担任生にしたこと

複数の教師の関わり方、指導案の作成

年間を通して T T を実施しているのではなく、効果があると考えた場合や、一部に限定した場合に実施している。

触れ合い活動との連携について

西村先生よりの指導・講評 指導第 1 課

主題について適当であった。校内研究活性化の目標にあった。教師の指導の工夫が大きな柱。先生方の熱意、気力に感心。環境教育について、感性豊かな児童生徒の育

成。ふれあい活動について

ＴＴについて、たまたま内藤先生といってＴＴを今年度実施（算数）されている先生を知っていて、その先生から少しばかり話を聞いており、実際にＴＴについて知っているわけでは無いので三ツ沢小学校ではＴＴをどのように実施しているのかと言うことに焦点をあてて参加した。参観前は、内藤先生から聞いていたように２人の先生が主と副に分かれて授業されていると思っていたが、そのような場面を見たのは理科だけで、ＴＴとは思えずただ二人の先生が実験の指導をされている、程度にしか見られなかった。

内藤先生にしてもかなりの条件を付けた上でＴＴを受けたようで、この先生の能力に大きく関わっているようで、かつて倉本先生が仰られたような大変さは目に見えるようである。実際には、実験校にしてもうまく作動していないようなことを漏れ聞いており、全てをきちんとやらなければいけない、とするのなら多くの学校でＴＴ（文字通りのＴＴを）実施するのは無理があろう。文部省視学官が言われるように、教師の心構え、体制として考えて実施するのが良いのかな、と考えた。

帰りに祖父江先生に伺ったが、ご自分は教務の主任をされており、同時に生活科などの主に低中学年のＴＴを実施しているというが、それも人手が欲しい時にだけその授業に出ており普段は教務の仕事をしているという話であった。

内藤先生は、５年生の算数でＴＴを実践されている。卒業学年を送りだした直後で、それもいいかなと考えたとのことだが、ＴＴを受けるに際しては条件をいくつかつけられたようである。

実践する中で、かなり綿密な週の学習計画を立てられていたが、内藤先生らしいと感心した。問題は、時数の確保で、進むクラス、遅れるクラスが出ること、また、土曜日に授業を設定しない方針であった為に、これまた、時数の不足につながったというが。現在のシステムを維持しながら新しいシステムを導入する難しさを感じられているようで、このままなら、おそらくＴＴは消えるのではないかと思う。

私が知っているＴＴについての情報はこれで全てである。